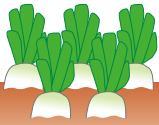
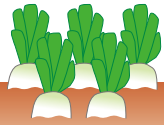


9 堆肥パワーをさらに発揮 地域の資源や気候も味方にしよう



堆肥の効果は、作業の工夫によってさらに高めることができます。肌がきれいで甘いカブを生産して、料亭で喜ばれている酒井さん（4頁）のやり方から考えてみましょう。

酒井さんの自家製堆肥はわが家・地域で入手できる落ち葉・米ぬか・もみガラ・大豆くずを2年くらいかけて発酵させたもの。成分は、現物で窒素0.5%程度と「肥料効果」は低めの堆肥です。そこで10a当たり堆肥2tと同時に、有機質肥料の油かすを20kg、発酵鶏糞15kgを散布し、耕うんして土に混ぜ込みます。

●堆肥・肥料を土になじませる

カブのタネ播きは害虫の少なくなる9月末ですが、酒井さんは1カ月前に、堆肥・肥料の散布と耕うんを終えておきます。この1カ月間に、土中で堆肥と有機質肥料の分解がすすんで土によくなじみ、発芽・発根の障害がなく根が元気に伸びる条件が整います。一方、土壌は軽く乾きやすい黒ぼく土ですが、まわりの水田で夏まで稲を育てていたため、下層土に湿りが残っており、施した堆肥がこれをとらえて保水します。また、種子根は水を求め



わが家・地域資源の堆肥でおいしく
きれいなカブづくり

て下へ下へとまっすぐに伸びていきます。このようにして、タネ播き後早く、種子根をまっすぐ深く伸ばすことが、美肌でおいしいカブを育てる第1条件です。

●土壌水分や気温の変化も活かして、楽しい堆肥活用

カブの生育につれて葉が土表面をおおうと、土の乾燥がある程度防げます。肥料分は有機物からゆっくりと吸収されて、カブがじっくり育つことが第2条件です。収穫期近くなって窒素が効きすぎると品質が落ちますが、11月上旬から12月初めの収穫のころには、土の乾燥がすすんで窒素吸収が抑